



APART



かわせ

Lost In The Air

—生きてるって言えるのかな？

帰って来ると同居人が死んでた。

って言い過ぎか。

でもこのうだるような暑さの中、エアコンも付けずに床に寝転がっているその姿は死体に近い。

私は彼を一瞥すると迷うことなくその腹を踏んだ。

「ぎゃおすっ」

奇声を発し、彼は目を覚ましたらしい。薄目で私の姿を確認して、お帰り、と呟いた。

私はただいま、と返して冷凍庫からアイスを取り出す。

足元から手が伸びて来たので、彼の分も取り出した。

「終わったの？」

床にしゃがみ込んで、まだ寝転がる彼にアイスを渡す。

寝ながら食べるのは止めて、と言うとのそのそと起き上がってきた。

「うん、すごく責められたし、泣かれた。参ったね、さすがの俺も」

開けっ放しの窓から無遠慮に差し込む光に、彼の髪の毛が照らされる。

蜂蜜色で少しくせ毛の、ふわふわしてる髪の毛。

男の癖に、髪だって顔だってとても綺麗で。

「面倒だった、すごく」

笑顔だけど目は笑っていないで、ああ、こいつ、死んでるんだった、と思い出した。

この顔でモテないはずがない。

けどどいるのは女だけ。

本気、なんて知らない男なんだった。

何で生きてんだろ、こいつ。

「ねえ、シたいんだけど」

いつの間にか間近に彼の顔が見えて、私は一瞬息を飲む。

誰にも心は渡さないくせして、自分はいとも簡単に人の心を奪う。

狡いな、と馬鹿な私は思うんだけど、口から出たのは了承の言葉だった。

結局私も、その他大勢の一人と何ら変わらない。

Rain Song

—それは私の憂鬱に似ている

雨が降ってきた。

一滴、顔にかかったけど、次の瞬間、頭上はピンクの傘に覆われた。

趣味わりいな。

俺は差し出された傘を見上げた。

「榛実が濡れちゃダメでしょ」

ありがとう、といちおう小さく礼を言うと女はすぐに笑顔になる。

隙間から見えた空は灰色で、しばらく雨は止みそうにない。

唐突に、彼女のことが浮かんだ。

雨が嫌いだと言っていた彼女。

何となく、帰ろうかなと思った。

「ゴメン、俺、帰るわ」

俺の言葉に女は目を丸くする。

次の約束が定かじゃない俺に、皆恐怖を覚えるらしい。

離れていってしまうんじゃないかって。

縁を切った女達は口々にそう言った。

でも、そいつらは勘違いしている。もともと近付いてすらいないのに。好きとか愛とかそんなもん、信じるだけ馬鹿を見るだけ。

「っ、分かった」

俺は彼女の傘から出ると、家まで歩き出した。

駅までの道で良かったな。

濡れるのは最悪だったが、傘を買うのも面倒だ。

どうせだるいとか思ってる内に家に着く。住宅街に混ざった、雰囲気のある俺らのアパートが見えてきた。

202号室。

見上げると電気が着いていて、彼女の存在を知らせる。

夕飯、俺の分あるのかな。

考えながら階段を昇り、扉の鍵を回すと開いてしまった。

俺の家でもあるのに不用心な。

髪の毛を結っている途中の彼女が台所に立っているのが見えた。

「げ、びしょぬれじゃん」

彼女は俺の姿を認めるなり、ため息を吐いた。

「ん、ああ」

「って何脱いでんの」

俺はとりあえず床を汚さないように、シャツを脱いで搾っていた。

「だって、料理しようとしてんだったら迷惑掛けないじゃん」

シャツを搾りきれるまで搾って、ジーパンに手を掛けたところでタオルが顔面に飛んできた。

「床汚したら自分で拭いてね」

「言われなくとも」

腰にタオルを巻いて、濡れてしまった服は全部洗濯機へ丸投げする。

横で料理をしだした彼女に聞く。

「今日の夕飯、何？」

ピーマンを切ってた彼女がこっちを向いた。

「あ、一人分で計算してた。鮭のムニエルなんだけど」

「俺肉が食いたい」

俺はぶー、と唇を尖らせた。

「自分で作りゃいいじゃん」

「えー、嫌だ」

「.....すぐできるのはピカタだけど」

「何それ」

「豚肉と卵一緒に焼くやつ」

「んじゃそれ頼むー」

俺はそれだけ言い残してシャワーを浴びに行った。

何となく、彼女といるのが心地良いのは、お互いに抽象的に求めている同士だからだろう。

別に誰でも良かったんだ。

そう、思い込んでいる。

Unknown

— 結末を知ったら、一気にやる気無くすよな

大苑榛実、という人物について、私は人づてにしか聞いたことがない。

でもその大抵がマイナスイメージのもので、だから私は極力彼に関わらないようにしていた。大学もそこまで狭くないから、語学のクラス、ゼミやサークルが同じじゃない限り、ああ、あいつが噂の、程度の認識で済む。

はずだった。

完璧なまでの誤算。

「お前さ、シェア相手探してなかったっけ？」

「ああ、うん」

授業終わり、眼鏡を外して顔をあげると、サークル仲間の宮城がいた。

私は先月まで友達とルームシェアして暮らしていたけど、その友達が大学を辞めて実家に帰ってしまったせいで、新しいルームメイトを見つけないと家賃を倍払わなければいけない羽目になってしまう。

だからクラスやサークルの人に話して、新しいルームメイトを探していたところではあった。

が、宮城の隣に立っている人間を見て、私は喜ぶにも喜べなくなった。

そこにいるのは大苑榛実。

道理で教室の女子の視線がこっちに集中するわけだ。

「大苑榛実、戸館も名前ぐらい知ってるだろ」

「まあ、ね」

ちらりと、視線を大苑へ向ける。

彼はその一瞬に反応し、整った笑顔を返してきた。

私に対してもこんな反応するんだ。

なんていうか、異質な男。

「とりあえずさ、授業終わったんだろ？ 適当にどっか行って話そうぜ」

「俺はいいけど、戸館さんは？」

「私もサークル行かなきゃいいだけの話だから」

立ち上がって、三人揃って教室を出た。

背中越しに色んな人の視線が刺さったけど、それは気にしないことにした。

ポテトとコーラを頼んで、二人が待つ席へと向かう。

二人は隣同士に座っていたから、私に残った選択肢は宮城か大苑の前。

宮城にはかわいそうだけど、大苑の目立ちようは半端ない。

私は迷わず目がイカれる前に宮城の正面を選んだ。

「男はまずいかなと思ったんだよ、さすがに」

顔をしかめ、宮城はハンバーガーを頬張る。

そう思うなら紹介すんな馬鹿。

「でも戸館、彼氏いんじゃない？ それにこいつもこいつだし、そんなに家に帰らないから大丈夫かもなーって」

ふーん、と適当に頷く。

「そーいのはまあーんだけどさ、何で大苑君、シェア希望なの？」

私の言葉に大苑はああ、と呟いた。

「彼女に追い出されてさ」

そう呟く彼の表情には何も浮かんでなくて、私は顔に出さないよう眉をしかめる。

「もうすぐルームメイトが出てってもう二週間だろ？ とりあえず試しに一週間、シェアしてみれば？」

宮城の提案に大苑は頷いた。

「あれだったら今月の家賃払うし」

それは願ってもない話。

ここまで言われて断るほど私も悪魔じゃない。

「んじゃとりあえず一週間試して、ね」

ほぼ決定だけど、いちおうという意味で返した。

彼が微笑んで右手を差し出す。

「よろしく、」

「こちらこそ」

私はその手を握った。

こうして、私と彼の生活が始まったのだった。

だけどこんなことになるなんて、私も彼も知らなかった。